



神戸大学愛唱歌「商神」の由来：旧制神戸高等商業学校の教育方針と神戸大学

野邑，理栄子

(Citation)

研究論叢, 13:13-21

(Issue Date)

2006-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002136>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002136>



神戸大学愛唱歌「商神」の由来

—旧制神戸高等商業学校の教育方針と神戸大学—

野邑 理栄子(神戸大学百年史編集室助手)

はじめに

2006(平成18)年は神戸大学の愛唱歌「商神(しょうしん)」が誕生して百年目にあたる。1906(明治39)年3月、神戸大学の前身校の一つである神戸高等商業学校の学友会歌として初めて発表された「商神」は、のちに同校の校歌・学歌として広く認識されるに至る。現在でも機会あるごとに歌われるこの歌は、2002(平成14)年5月神戸大学創立百周年記念式典の祝賀会でも大合唱され、会場を盛り上げたことは記憶に新しい⁽¹⁾。

神戸大学には戦後創設された正式な学歌がある。それにもかかわらず神戸高等商業学校以来歌い継がれてきた旧学歌「商神」が、今なお大切に愛唱されるのは何故だろうか。また、「商神」があるにもかかわらず神戸大学が新しい学歌を創設したのは何故だろうか。

本論では、神戸大学と同様に高等商業学校を起源にもつ一橋大学を比較対象としつつ、神戸大学愛唱歌「商神」の由来をたどることを通して、神戸高等商業学校がどのような教育方針を抱いていたのか、また旧学歌「商神」の継承を拒んだ神戸大学がどのような課題を持ち何を目指していたのかをそれぞれ明らかにする。これにより、様々な旧制高等教育機関を統合させて戦後発足した新制総合大学が、発足当初から現在に至るまで継続的に抱えていたジレンマの一事例を提示できるのではないかと考える。

1 商神とは何か

「商神」とは何を指すのか。わが国で一般的に商業の神といえば七福神の一柱「えびす」であろう。しかし、近代日本の商業教育機関において商神といえば、ギリシア神話に登場する商業の神ヘルメス(後のローマ神話ではマーキュリーまたはメリクリウスとなる)を指す。商神ヘルメスは、翼のついた帽子とサンダルを身につけ、2匹のヘビが絡まる伝令の杖ケリュクオン(ラテン語でカドゥケウス)を持つ姿で表現される(図1参照)。



図1 「商神」の絵葉書
〔出典〕「創立廿五周年記念祭絵葉書」神戸高等商業学校学友会、1928年、神戸大学百年史編集室所蔵。

図1は1928(昭和3)年5月13日神戸高等商業学校学友会発行の「創立廿五周年記念祭絵葉書」であり、「商神」の楽譜と、バルジェッロ美術館蔵のジャンボローニャ作「メリクリウス」像の写真が掲載されている。これが商神の姿とされる。

なお、紀元前2世紀後半にギリシアを占領したローマが、ギリシア神話を吸収してローマ神話を作り上げた。その際にギリシア神話の商神ヘルメスは、ローマ神話ではラテン語名メルクリウス、英語名マーキュリーと名前を変えた。一

橋大学の前身である東京高等商業学校では主にローマ神話を典拠にマーキュリーの名称を使用した。神戸大学の前身である神戸高等商業学校では典拠を示さず単に商神と称することが多かった。

では、なぜヘルメス(マーキュリー)は商神とされるのか、その理由をギリシア神話から探してみたい。ヘルメスは神々の王ゼウスの息子である。この神の子はただ者ではなかった。赤ん坊ヘルメスは生まれたその日に、空腹のため異母兄アポロンから牛50頭を盗み出す。この盗みは実に巧妙で、牛の尻尾を引っ張って後ろ向きに歩かせ、自分は特殊な形の草履で足跡を混乱させ、犯人が特定できないように仕組んでいた。牛2頭を殺した後、亀の甲羅に牛の腸を張り、7弦の立派な堅琴を作り出す。そして何食わぬ顔でゆりかごに戻った。大事な牛を盗まれ怒り心頭のアポロンは、予言の神の霊力でもって犯人ヘルメスを突きとめ、彼をゼウス大神の前に連れ出して審問した。だがヘルメスは自分の無実を言葉巧みに訴え、その天才ぶりはゼウスやアポロンの舌を巻かせる。結局アポロンに牛を返すことになったヘルメスは、罪滅ぼしと称してアポロンの前で自作の堅琴を演奏した。実はこれもヘルメスの作戦であり、その甘美なる音色に魅せられたアポロンは、牛と引き換えに堅琴を譲ってほしいと申し出る。これが「商取引のはじまり」だとギリシア神話は語る。そこからヘルメスは商業の神となったのである。ちなみに堅琴を譲り受けたアポロンは音楽の神となった⁽²⁾。

2 商神と二つの高商

ギリシア神話とキリスト教は、欧米文化の二大源流と言われる⁽³⁾。近代化を目指す日本は、欧米の商業教育を学び吸収する過程でギリシア・ローマ神話の商神ヘルメス(マーキュリー)と出会った。

1887(明治20)年、わが国最初の高等商業学校(現在の一橋大学)が東京に誕生した。よ

り高い水準の教育を目指して、ベルギーのアンヴェルス高等商業学校(以下、アンヴェルス高商と略す)に範をとる⁽⁴⁾。高等商業学校教授でのちに大阪市長となった関一の留学先もベルギーである⁽⁵⁾。当時ベルギーはイギリスに次ぐ世界第2位の工業国であり、イギリスを追い抜くため優秀な外国貿易業者と領事の育成を図り1852年にアンヴェルス高商を設立。パリの高等商業学校とともに世界最良の商業学校と評されたという。アンヴェルス高商の教育は、商業実践に最大の重点が置かれており、東京の高等商業学校もその特色を導入して実践教育を重視した。このベルギーのアンヴェルス高商の校章を模して1887年頃に制定されたのが、商神マーキュリーの校章である⁽⁶⁾。マーキュリーの杖ケリュケイオンを図案化したものに、Commercial Collegeの頭文字C・Cが配されたこの校章は、太平洋戦争末期の一時期を除き、現在でも一橋大学の校章として使用されている。1904(明治37)年に作成され「一橋を代表する歌」とされる一橋会歌「長煙遠く」全14番にも、「マーキュリー」の名が2度登場する⁽⁷⁾。このように東京の高等商業学校にとって商神マーキュリーは、ベルギーのアンヴェルス高商を模範として世界最良の商業教育を目指そうとする重要な旗印だったと言えよう。

1902(明治35)年、わが国2番目の高等商業学校となる神戸高等商業学校(以下、神戸高商と略す)が誕生した。なお神戸高商の誕生により東京の高等商業学校は東京高等商業学校(以下、東京高商と略す)と改称する。神戸高商の初代校長となった水島鏡也は、1903(明治36)年10月25日の開校式の式辞で次のように述べた。

当校の教育に対する小官の方針を一言せんに、(中略) 日常の授業上に於ては所謂学理に偏するの弊を避けて、成るべく実地活用の才を養成し、又特に外国語に重きを置き、海外貿易に従事するに適せしめんと

欲す⁽⁸⁾。

すなわち水島は、高尚な「学理」よりも現実的な「実践」を重視し、かつ国際経済の舞台上で活躍できる人材の育成を目指した。この教育方針は東京高商と同様のものである。わが国の経営学の祖である平井泰太郎が「神戸はもともと一橋の分身である。初期は水島始め、教授中の少なからざる人々は一橋人である。」⁽⁹⁾と述べたように、神戸高商に赴任する前の水島は東京の高等商業学校教授であった⁽¹⁰⁾。ゆえに水島が目指した実践的商業教育や海外貿易業者の育成は、アンヴェルス高商を模範とした東京高商の教育方針を継承するものであったと考えられる。

しかし水島は、1903年4月25日制定の神戸高商の校章には、東京高商のような商神マーキュリーを使用せず、地元神戸の湊川神社の紋である菊水を採用した。菊水の図案に Higher Commercial School の頭文字 H・C・S を配する校章は、神戸を強く意識する地元志向の表れであった。神戸は日本有数の国際貿易都市である。世界の潮流を把握し国際経済の場で活躍できる有能練達な人材の育成を志向する水島にとって、神戸は最良の適地であったに違いない。水島自身も神戸とは縁が深く兵庫県立神戸商業講習所の卒業生であった。また『筒台廿五年史』によれば、「水島校長は、先づ湊河の邊りに安らかに眠つてゐる南朝の忠臣に因んで、菊水を用ふことに決めた」が、菊水の紋をそのまま使用することは畏れ多く、瑞宝章を模して形を崩したとのことである⁽¹¹⁾。それゆえ『水島鏡也先生伝』は「校章に日本精神の権化而かもこの地に最も縁由深き大楠公を拉し来つて、菊水を用ひられた」と説明する⁽¹²⁾。水島は開校式の式辞においても、「本校に於ては先づ品性の陶冶を努め、道徳の堅固なる人物の養成を期す」と述べていた⁽¹³⁾。

水島率いる神戸高商は、基本的には東京高商の教育方針を引き継ぎつつも独自のあり方を

模索し続けた。こうした世界に開かれた広い視野と日本的徳育を重視する教育方針こそが、神戸高商の学友会歌「商神」を生み出す土壌となった。

3 学友会歌「商神」の誕生

「商神」は、1906(明治39)年3月26日発行『学友会報』第5号(神戸高等商業学校学友会編纂)誌上で、「神戸高等商業学校学友会の歌」としてはじめて発表された⁽¹⁴⁾。これは学友会興風部が懸賞募集し、前年12月に最終締切、校長水島鏡也ほか教官・学生の計12名の審査により1等当選したものである。なお最初は校歌として募集され、審査の過程で学友会歌に変更された形跡がある⁽¹⁵⁾。

「商神」の作詞者・忠田兵造は、神戸高商の第2期生である。彼が「商神」を作成した当時の神戸高商は、まだ開校3年目の草創期で学生も全学年が揃っていなかった。忠田は本科1年生で、上に本科2年生、下に予科生はいたが、最上級の本科3年生がまだ不在であった。校歌募集の企画は日露戦争中に持ち上がった。日本海海戦の祝捷会を学内で催したとき、皆で歌える校歌が無かった無念さが一つの契機だったようだ⁽¹⁶⁾。現在では考えられないが、企画や募集、審査に至るまですべて学生たちが主導した。教官の手を借りたのは審査の時だけである。発表当初は歌詞だけで、題名も曲も付されていなかった。その後作曲を兵庫県御影師範学校の音楽教諭、米田虎之助⁽¹⁷⁾に依頼し、その初披露は1906年6月8日の学友会新入会員歓迎会の場で行われた。これは全学年の学生が初めて揃った記念すべき瞬間でもあった。「商神」の歴史は、神戸高商の完成とともに始まったのである。席上では学友会語学部所属の音楽部員たちが演奏と合唱を担当し、「満堂崩るゝ計りの拍手喝采」であったと当時の『学友会報』は報じている⁽¹⁸⁾。なお「商神」という題名が見られるのは、翌1907(明治40)年4月8日発行『学友会報』第8号掲載の歌詞全文「学友会

歌「商神」が最初であろう⁽¹⁹⁾。

作者者の忠田は、卒業と同時に文才を生かして大阪朝日新聞社（現在の朝日新聞大阪本社）の編輯局に就職した⁽²⁰⁾。当校出身の新聞記者第1号である。「商神」を生んだ忠田ら第2期生に相応しく、彼らの卒業アルバムの表紙には商神の杖ケリュケイオンと菊水が描かれた（図2参照、ケリュケイオン部分のみ抜粋）⁽²¹⁾。

神戸高商の学友会歌「商神」はその後（遅くとも1928年までには）同校の“校歌”として広く認識されるに至り、大学昇格後も神戸商業大学・神戸経済大学の学歌として引き続き親しまれていった⁽²²⁾。

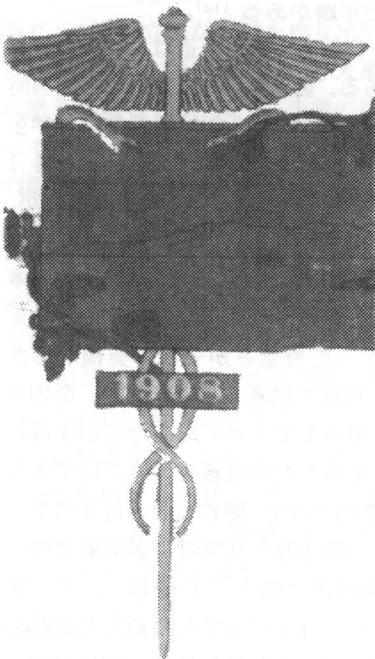


図2 神戸高等商業学校第2期生の卒業アルバムの表紙（部分）

〔出典〕『Souvenir Album 1908』神戸高等商業学校第2回卒業生、1908年、神戸大学百年史編集室所蔵。

4 「商神」の歌詞をたどる

神戸高商の学友会歌（校歌）「商神」とは、一体どのような内容の歌だったのか。全8番ある歌詞のうち主軸となる1・2・8番を取り上げてみたい⁽²³⁾。

まずは1番の歌詞とその大意は以下の通りである（カッコ内は漢字の読み、旧字体は新字体に改めた、なお【大意】の文責は野邑にある）。

- 1、商神彩（あや）なす翹（つばさ）をあげて
靈杖（れいじょう）遙（はるか）に東（あづま）を指せば
靈（たま）（く）しき果実（このみ）は雲間（くもま）を漏（も）りて
秋津島根（あきつしまね）に落（お）つとぞ見えし
所（ところ）はこゝぞ菊水（きくづ）かをる
湊河原（みなとがはら）の近（ちか）きほとりに
かく伝（つた）はりし天（あめ）のさとしも
人はさとらで幾年（いくとせ）か経（た）ぬ

【大意】商神ヘルメス（マーキュリー）が、美しい翼をあげて、聖なる杖ケリュケイオン（カドゥケウス）で遙か東の方角を指すと、天から聖なる果実が降ってきて日本に落ちた。場所はここ神戸である。このように伝わった天のご神託も、人々はこれを悟らないで（察知しないで）、そのまま何年か過ぎた⁽²⁴⁾。

次に2番の歌詞とその大意は以下の通りである。

- 2、神の息吹（いぶき）のこもりて成（な）りし
靈果（れいこ）いかでか地（つち）に朽（く）つべき
豊榮（とよさか）昇（あ）る朝日（あさひ）のかけに
八洲（やしま）の外の潮風（うしほ）吹（ふ）きて
いつしか催（もよほ）す氣運（きうん）に乗（の）り
わが学校（がっこう）（まなびや）ぞ世（よ）に生（な）れたる
眠（ね）る商界（しょうがい）夢（ゆめ）さますべき
使命（しめい）は天（あめ）の授（たま）げし所

【大意】商神の息吹がこもる聖なる果実が、このまま朽ち果てるはずはない。輝き昇る朝日の

光に、日本の外から海を渡って近代化の風が吹き込み、その気運に乗じて我が学校は生まれたのだ。「眠る商界」の夢を覚まさねばならぬ使命。それは天が我らに授けたものなのだ⁽²⁵⁾。

最後に 8 番の歌詞とその大意は以下の通りである。

8、ああ芳(かぐ)はしき桜の国の
咲くや此花難波津近く
帆船黒船出入(いでいり)しげき
神戸は我等の北溟なるぞ
鵬翼図南の時至る迄
いざや静に学び修めて
祖国の栄を我等祈らむ
我等の栄を神に祈らむ

【大意】かぐわしい桜の国、日本の難波津近く、帆船・黒船が頻りに出入りする神戸は、我らが世界に羽ばたく拠点なのだ。大志を抱いて世界に雄飛するその時まで、さあ心静かに学問を修め、祖国日本の繁栄を祈ろう。我らの栄光を神に祈ろう⁽²⁶⁾。

以上が「商神」の歌詞の意味である。「眠る商界」を叩き起こし日本を“世界の日本”にまで高めるその使命を背負って我が神戸高商は生まれた。商神に選ばれた神戸高商。日本経済の行く末は我々の双肩にかかっている。我らは世界に雄飛するその時まで、じっと雌伏して勉学に励もう。我らは世界に羽ばたく国際人になるのだ、と宣言する内容である。

注目すべきは次の 2 点である。

1 点目は、国際的経済人の育成に力を注いだ初代校長水島の教育方針の影響が、随所に表れていることである。このような世界的視野の存在は、神戸高商・東京高商の共通する特徴といえよう。例えば、日本三大寮歌⁽²⁷⁾とされる第一高等学校「嗚呼玉杯に」(1902 年)、第三高等学校「紅もゆる」(1905 年)、東北帝国大

学農科大学予科「都ぞ弥生」(1912 年、のちの北海道帝国大学予科)は、世界的視野の欠如という共通の欠点をもつ。寮歌には当時の学生たちの思想、目標、精神が込められている。しかし旧制高等学校の寮歌の多くは、国際交流の観点が抜け落ちているのである。「栄華の巷低く見て」と高みから大衆を見下ろすエリート意識や、「通へる夢は崑崙(コンロン)の高嶺の此方戈壁(ゴビ)の原」と遠き異国に思いをはせることはあっても、国際社会の一員として自分たちを位置づけるまでには至らない。旧制高等学校は、自治を重んじる全寮制、外国語の重視といった独自の伝統をもっていたが、世界規模の広い視野で自分たちをとらえ国際的なつながりを重視する姿勢はその寮歌からはうかがえない。これは世界を股に活躍することが期待されていた高等商業学校の場合とは大きく異なる点であろう。

2 点目は、ギリシア・ローマ神話の商神ヘルメスまたはマーキュリーを単に漢字で「商神」と表現したことである。これは「マーキュリー」の名が 2 度出てくる東京高商の一橋会歌「長煙遠く」(1904 年)と異なる点である。例えば、東京高商の後身である東京商科大学には次のような太平洋戦争中のエピソードが残されている。

野球の『ストライク』が『よし一本』ボールが『駄目』と言われるようになった戦争末期の狂瀾時代、外来思想、外来語は凡て国体に悖るものとして弾圧されこの余波は当然一橋のシンボル『マーキュリー』に及んだ。古事記の古典を省みることなくしてギリシャ神話に基く校章を作るとは何事か。このような相次ぐ外部からの圧力に加えて、驚くべき事には内部より夫に迎合賛同する意見が現れ、かくして昭和十八年末期から校章改正問題が討議研究される事となった⁽²⁸⁾。

戦時中の東京商科大学では校章「マーキュリー」使用の是非をめぐる論争が起り、1944（昭和19）年末に校章変更となった（戦後復旧）。しかし神戸高商の後身である神戸商業大学では戦時中でも学歌「商神」をめぐる争われた形跡はない。神戸高商の「商神」はギリシア・ローマ神話に依拠しつつもその形跡を直接見せず、むしろ勤皇の武士楠木正成家紋「菊水」や古事記に出てくる「秋津島根」「八洲」といった日本国の古称などを用いることで皇国日本のイメージを表出させたのである。

このように世界に開かれた広い視野と日本的道徳を併せ持つ学友会歌・校歌「商神」が草創期の学生たちの手で作成されたことは、校長水島の教育方針が当時の学生たちに深く浸透していたことを示すものであったと言えよう。

5 「商神」と水島鏡也

学友会歌・校歌「商神」は初代校長水島の教育方針が現出したものである。また学生にとって「商神」は、水島との恩愛の絆を深める一手段ともなった。水島の伝記『水島鏡也先生伝』には「商神」にかかわる数多くのエピソードが収められている。

1907（明治40）年5月18日、水島は海外視察のため神戸を出帆した。『水島鏡也先生伝』には見送りに来た学生たちの様子が次のように描かれている。

青葉薫る五月十八日、盛大な歓送裡に、神戸出帆の因幡丸の客となつて歐洲に向はれた。此日ランチ数隻に分乗した学生一同は、校歌『商神』を合唱しつゝ、同船の周囲を一周し、長途の御旅行恙なからんことを祈つた⁽²⁹⁾。

学生たちは「商神」の合唱で水島を見送ったという。また1925（大正14）年5月、水島が病弱を理由に辞表を提出した際、校内で留任運動が起こったが、その時も同様であった。

先生は之（留任懇願）が熟考の爲めに、また疲れた心身の静養をも兼ねて、伊豆熱海へ赴かれることとなつた。五月二十五日の夕刻、先生出発の直前まで、講堂に集まり大会を開いてみた学生は、その会を閉ぢるや否や直ちに三ノ宮駅に馳（ママ）け付けた。忽ちにして駅の内外は千余の制服の若人と背広服の同窓生とに依つて埋め尽され、彼等は『一目でも校長の顔を』と轟めき合つた。車窓から半身を乗り出された先生が、憔悴した面に涙を浮べて『諸君有難う』と声を落して挨拶せられた時、列車は静かに滑り出した。萬感胸に迫つて唯黙々と見送つてみた一同は、列車が稍遠ざかつて後、初めて静かに校歌『商神』を合唱した⁽³⁰⁾。

留任懇願の意を「商神」の合唱で示した学生たち。その願い叶わず水島は神戸高商を後にする。そして同年10月17日、水島の胸像除幕式が同窓会である凌霄会によって実施された。

この日主賓の先生を始め、先生の御家族其他の来賓四百余名を迎へ、凌霄会員二百数十名列席、之に全校の教職員並びに学生千余名が加はり、いとも盛大なる式が行はれたのであつた。廳で寛やかな『商神』合唱の内に、先生令嬢富貴子さんの手によつて紅白の帷が落され、凜乎たる先生の英姿が現はれた時、二千に近き一同の拍手と歓呼とは四辺を圧するが如く鳴り響いた⁽³¹⁾。

辞職3年後の1928（昭和3）年に水島は逝去する。その後1931（昭和6）年には、水島生誕の地である大分県の旧中津藩水島家旧邸跡に「水島鏡也先生誕生之地」記念碑が建立された。記念碑の最上部には「商神の杖」がデザインされており、水島と商神の深い関係を物語っている⁽³²⁾。

おわりに

1949 (昭和 24) 年 5 月、新制の神戸大学が誕生した。神戸経済大学長から初代神戸大学長に就任した田中保太郎は、1953 (昭和 28) 年 1 月 16 日に『神戸大学新聞』の取材を受け、次のような抱負を語った。

全学の学徒が愛唱するような学歌を作りたい。これは学生及び学校関係者の間で募集したいと思っているから今から想をねって立派な作品を出してもらいたい⁽³³⁾。

誕生まもない当時の神戸大学では、旧神戸経済大学の学歌「商神」が引き続き歌い継がれていた。神戸大学学歌の代わりに「商神」が担っていたのである。しかし田中はその現状に異を唱えて拒絶し、新たな学歌の創設を望んだ。それは何故か。田中は同じ取材の中で次のようにも述べている。

従来は各学部の創業と充実に主力がおかれていたのであるが今後は神戸大学内の各学部の緊密な協力体制の実現によって本当の意味の総合大学の実を挙げたい⁽³⁴⁾。

すなわち「本当の意味の総合大学」を目指して全学一致の協力体制を作り上げる必要があったからである。その手段の一つが新しい学歌の創設であった。神戸大学は兵庫県下の様々な旧制官立高等教育機関を統合して誕生した。唯一の旧制大学であった神戸経済大学が統合の過程で中心的な役割を果たしたが、総合大学として発足した神戸大学に神戸経済大学の伝統をそのまま引き継ぐ訳にはいかない。旧学歌「商神」の存在は、神戸大学にとって真の総合大学を目指す上で障害となっていたのである。

なお、神戸大学と同様に高商・商大を前身とする一橋大学は、神戸大学とは別の道を選択する。例えば一橋大学の最先端研究拠点として 2004 (平成 16) 年に完成した大学院総合研究

棟は、商神の名を取って「マーキュリータワー」と命名された⁽³⁵⁾。また同窓会・如水会の建物である如水会館には、3 階の庭園にマーキュリー像が建てられ、玄関の取手部分にはマーキュリーの杖がデザインされている。さらに法人化を契機にユニバーシティ・アイデンティティ確立の観点から 2005 (平成 17) 年に校章「マーキュリー」が商標登録され、大学広報活動の軸として大々的に活用されている。このように一橋大学が旧東京商科大学の歴史と伝統を象徴する商神マーキュリーの校章を継承できたのは、新制においても社会科学系大学として出発したからである。本格的な総合大学を目指す故に旧学歌「商神」の継承を否定した神戸大学とは大きく異なる点である。

1992 (平成 4) 年、神戸大学の学歌が完成した。無論その歌詞には「商神」の名は出てこない。入学式や卒業式などの公的な式典ではこの新しい学歌が歌われるようになる。そして旧学歌「商神」は神戸大学の愛唱歌となった。学生の課外活動や学園祭、節目の記念式典などで歌い継がれている。神戸大学は「商神」百有余年の歴史と伝統、そして総合大学としての全学統合の課題を抱くそのジレンマの中で、今なお模索を繰り返している。

注釈

- (1) 「おめでとう百周年」『凌霜』354、神戸大学凌霜会、2002 年 8 月号、9 頁。
- (2) マイケル・グラント、ジョン・ヘイゼル『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店、1988 年、502～505 頁。豊田邦二『ギリシア神話』ナツメ社、2005 年、41、98～101 頁。
- (3) 丹羽隆子「解説」前掲『ギリシア・ローマ神話事典』xi 頁。
- (4) 猪谷善一「ベルギー・アンヴェルス商科大学と日本」『早稲田商学』241、1974 年 3

- 月号、3～29頁。
- (5) 『関一日記 大正・昭和初期の大阪市政』東京大学出版会、1986年、972頁。
- (6) 『一橋大学百二十年史』一橋大学、1995年、24～25、32頁。『一橋大学百年史』財界評論新社、1975年、125頁。
- (7) 菲澤嘉雄「一橋の歌をめぐって」旧制高等学校資料保存会編『日本寮歌大全』国書刊行会、1996年、282頁。『日本寮歌大全・別巻』同前、258頁。
- (8) 「神戸高等商業学校開校式」中「校長演説」『学友会報』1、神戸高等商業学校学友会、1904年3月3日、73頁。
- (9) 平井泰太郎『水島鏡也』日本経済新聞社、1959年、212頁。
- (10) 『高等商業学校一覽 自明治三十三年至明治三十四年』高等商業学校、13頁。
- (11) 『筒台廿五年史』神戸高等商業学校内筒台史編纂会、1928年、12～13頁。
- (12) 『水島鏡也先生伝』愛庵会、1939年、133～134頁。
- (13) 前掲『学友会報』1、73頁。
- (14) 「神戸高等商業学校学友会の歌」『学友会報』5、神戸高等商業学校学友会、1906年3月26日、1頁。歌詞全文が掲載されている。
- (15) 「興風部」中「校歌」『学友会報』5、51～52頁。
- (16) 「興風部」『学友会報』4、神戸高等商業学校学友会、1905年7月20日、106頁。
- (17) 石井義章氏の調査によれば、米田の本名は米野鹿之助であった可能性が高いという。詳細は石井義章「歌い継ぎたい我等が寮歌4「商神」の作曲者」『凌霜』332、神戸大学凌霜会、1997年2月号、34～35頁を参照のこと。
- (18) 「興風部」中「新入生歓迎会」『学友会報』6、神戸高等商業学校学友会、1906年9月25日、108～110頁。
- (19) 「学友会歌 商神」『学友会報』8、神戸高等商業学校学友会、1907年4月8日、裏表紙。
- (20) 『神戸高等商業学校一覽 自明治四十一年五月 至明治四十二年三月』神戸高等商業学校、1908年、101頁。
- (21) 『Sovenir Album 1908』神戸高等商業学校第二回卒業生、1908年。
- (22) 前掲『筒台廿五年史』28～29頁。『神戸大学凌霜七十年史』財界評論新社、1976年、122～123頁。
- (23) 前掲「神戸高等商業学校学友会の歌」。なお、3・4番の歌詞は主に神戸高商をとりまく環境を語ったもの、5番はその環境が学生たちの智徳を磨くこと、6・7番はその智徳をもって世界での活躍を目指すことが歌われる。
- (24) 「秋津島根」は日本国の古称。「湊河原の近きほとり」は神戸の地を指す。
- (25) 「八洲」は日本国の古称。
- (26) 「鵬翼凶南」とは、北の大海（北溟）にすんでいた巨大な魚（鯨）が、おおとり（鵬）に姿を変えて、北から南へ一気に飛ぼうとした故事にちなみ、大事業や遠征を企てる大志を指す。〔莊子〕
- (27) 高橋佐門「寮歌概論」旧制高等学校資料保存会編『日本寮歌大全』国書刊行会、1996年、36頁。
- (28) 『一橋専門部教員養成所史』一橋専門部教育養成所史編纂委員会、1951年、163～164頁。
- (29) 前掲『水島鏡也先生伝』152～153頁。
- (30) 同前書、265～266頁。カッコ内は引用者注。
- (31) 同前書、278～279頁。
- (32) 同前書、40～41頁。
- (33) 『神戸大学新聞』神戸大学新聞会、1953年1月25日。なお本史料は「史料紹介 歴代学長が語る神戸大学の実情と課題（第一回）」『神戸大学史紀要』6、神戸大学百年史編集委員会・百年史編集室、2005年3

[研究論文] 神戸大学愛唱歌「商神」の由来
—旧制神戸高等商業学校の教育方針と神戸大学— (野邑理栄子)

月 23 日、94～95 頁に全文が掲載されている。

(34) 同前記事。

(35) 広報誌『HQ』4、一橋大学、2004 年夏号、33～36 頁。